

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】代珂

【所属】(助成決定時) 首都大学東京大学院人文科学研究科

【研究題目】実況録音からみる「満洲国」ラジオ放送の多文化性- 中国吉林省档案馆録音盤の調査を中心に

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、1930年代から40年代にかけて満洲地域(「満洲国」、関東州)におけるラジオ放送事業をテーマとして、当時の実際に放送した内容を調査することによって、文化的視点から放送モデル・放送効果を描き出すことを目的とするものである。「五族協和」を理想とした「満洲国」では、二重放送(第一放送日本語、第二放送中国語・その他)という多言語放送システムを作り出し、ラジオの文化メディアという機能を極めて強調した。実際の聴取効果と普及状況を見れば、放送政策において多文化統合及び新文化創出という目的を重視したものの、第一放送の肥大化と第二放送の凋落という結果になってしまっている。その理由を明らかにするために、放送内容に対する調査分析から「満洲国」のラジオ放送事業における多文化性を考察し、聴取側の受容効果との比較研究を通して検証を行う。

【研究の内容・方法】(800字程度)

放送における多文化的内容を検証するために、本研究は主に当時の聴取側に好かれた慰安(娯楽)放送及び放送側に期待された教養放送という二つの部門に焦点を絞り、その放送内容に対する調査を行った。調査地域は、主に中国東北(長春、大連など)の各ラジオ放送に関する文献、材料が保存されている档案馆・図書館、そして日本の関係資料を所蔵している機関に定めた。文献資料の調査とともに、情報収集及び効果検証のために、関係者へのインタビュー調査を行った。それぞれの内容を以下にまとめる。

・娯楽放送

「満洲国」のラジオ放送が開始してから、文化的にもっとも聴取者に期待され、聴取率の高い部門は娯楽放送である。そのなかでは劇放送(ラジオドラマ、放送小説、伝統劇)が、アンケート調査の結果で聴取希望者が半数以上を越え、特に注目されていた。第二放送の場合、今回の調査で内容まで把握できる実際に放送されたラジオドラマを約50本発見し、ラジオドラマの誕生、発展、変容までの過程がほぼ把握できる。劇放送に関しては内容的に、文学作品を改編したもの、放送劇団によるオリジナル創作及び映画内容を放送する「放送映画劇」という三つのスタイルを示した。改編作品の中では、シャーロックホームズなど、海外の流行文学に基づいた作品も数多くあった。同時に、「ノモンハン事件」などを題材とし、時事に結びつける作品も重視された傾向があった。さらに放送側の放送方針と聴取側の受容反応に加え、劇放送を代表とした文化性に対する検証ができるようになった。その結果の一部は、「中国社会文化学会」にて「満洲国におけるラジオドラマの変容-娯楽放送から国民演劇へ」というタイトルで口頭発表を行った(2013年7月、東京大学)。

・教養放送

教養放送の内容として語学講座(第一放送中国語、第二放送日本語)、講演というの一般的なものが、「満洲国」では当時日本の経験から、学校における指導教育を目的とした学校放送を教養放送の一環として導入した。もっとも直接に教育機能を発揮できる部門であったという理由から、今回の調査研究の対象とした。「満洲国」の学校放送は日本と違い、日本人教師、日本人生徒、中国人教師、中国人生徒という四つのセク

ションに分けられた。しかしそのなか、中国人生徒に対する放送はほぼ設備の関係で欠落していることと、放送内容から見れば中国人教師と日本人教師に対する放送はかなり方向性が違っていたことが分かった。まず、教師の常識涵養のための内容、教授法などを中心内容とした日本人教師を対象とした放送にたいして、中国人教師に向けた放送は国政解説、日本語指導講座などの内容が多く見られた。具体的にそれぞれの放送内容と放送方針を比較することによって、学校と放送がイデオロギー諸装置として民族別に機能していたことが分かる。その検討結果を以下の研究論文にまとめて公開した。

『『満洲国』における学校放送とその機能』、『人文学報』NO.478、首都大学東京人文科学研究科、2013.3

【結論・考察】（400字程度）

民族別、言語別に放送内容を編成して発信した「満洲国」のラジオ放送事業は、多文化が共存していた特異性が無視できない。今回の調査研究で明らかにしたように、いずれの部門も、特定した編成方針及び内容構成を備えていた。内容だけに注目すれば、文化統合、そして文化創出という機能を、「満洲国」のラジオ放送が十分に発揮したように見える。しかし、聴取側の不評が顕在化した問題から出発し、放送内容を深く検証すれば、その異文化統合のための、放送側が主導し、期待した放送メディアを利用したイデオロギー統制が、放送内容の潜在的単一化、そして聴取効果の二分化に導いたことが分かる。今回の二つの調査対象には、内容的にそれぞれの変容時期があった。劇放送が繁盛を見せたものの、内容検閲及び統制の強化とともに自主創作が減少し改編作が増加する傾向がある。そして学校放送も太平洋戦争の勃発によって、戦時協力を宣揚し、日本を主導としたイデオロギーの拡散装置となってしまった。これらの変化が同時に作用した結果、「満洲国」のラジオ放送の多文化性が崩れてしまったことが明らかである。しかし、多文化的内容を取り入れてそれを表現するメディアとして作られた「満洲国」のラジオ放送は、その機能を一時的に発揮していた事実があったことは、この調査のもっとも貴重な成果であったといえる。